慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幕末知識人の西欧認識と対外政策 : 吉田松陰と福沢諭吉の間
Sub Title	The conscientious recognition of intelligent people about Europe and foreign policy in the later Tokugawa period : the relationship between Yoshida Shoin and Fukuzawa Yukichi
Author	飯田, 鼎(Iida, Kanae)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.2 (2000. 7) ,p.289(1)- 313(25)
JaLC DOI	10.14991/001.20000701-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20000701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」93巻2号（2000年7月）

幕末知識人の西欧認識と対外政策

――吉田松陰と福沢諭吉の間――

飯田　鼎

（一）　幕末における世論とイデオロギー

幕末とは，ある意味で不思議な，興味ある時代である。一般に幕末とは，1853（嘉永六）年六月三日，アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官ペリー（M.G. Perry）が，軍艦四隻を率いて浦賀に来航，遣日国使の資格で，幕末に国交を要求し，二七〇年余に亘って国是としてきた鎖国政策の変更を余儀なくさせられた事件から始まったとされている。それから十五年，1868（慶応四）年，九月八日，新政府は明治と改元し，この時点でいわゆる幕末は終焉を迎えた。ここから明治政府の近代化政策が推進され，日本が，従来の封建的な諸制度を廃棄して，近代国家としてのスタートをきったのは，1877（明治十）年，西郷隆盛が城山で自刃し，士族階級の最後の抵抗ともいうべき西南戦争が終った時期であった。

してみると，黒船の来航から西南戦争の終結までわずかに二五年，すなわち実に四半世紀の間に，日本は，封建的体制の国家から近代国家への転換をとげるという，まことに世界近代史上，稀にみる急速な，従ってまた革命的な変化を体験したのであった。

この変革が，いかにすさまじいものであったか，筆者は，幕末日本を考えるとき，つぎのカール・マルクスの一文を想い出す。

「日本は，その土地所有の純封建的な組織と，その発達した小農民経営とをもって，多くはブルジョア的偏見によって書かれたわれわれのすべての歴史書よりも，はるかに忠実なヨーロッパ中世の像を示す。中世の犠牲において『自由主義的』であることは，あまりにも便宜的ありすぎる」[(1)]。

この短い文章は，「第七篇　資本の蓄積過程」の「第二四章　いわゆる本源的蓄積」のなかに，脚注として現われているものであるが，その示唆するところは深長である。

（1）　Karl Marx, Das Kapital, 1867. 向坂逸郎訳『資本論』第一巻，岩波書店，1975年，899頁。

『資本論』第一巻が出版されたのは，1867（慶応三）年で，当時，幕府は，断末魔の状態であったが，マルクスの眼に何らかの史料を通じて投影された日本の社会は，「われのすべての歴史書よりも，はるかに忠実なヨーロッパの像を示す」という。

徳川封建体制が，限りなくヨーロッパ社会のそれに近いとすれば，この東洋の島国帝国において，つぎに来る体制が資本主義であること，そしてこの国の開国が間もないことを，マルクスは暗示しているかのようである。一体，マルクスは，日本にかんするこのような認識を，いつ，どのようにして，誰から獲得したのであろうか。この脚注の文章については，その出典は明らかにされていないので，想像の域を出ないのであるが，筆者は，かの有名なフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philip Franz von Siebold）の著作からではないかと考えている。しかしあるいは，マルクスの『資本論』執筆時，日本における滞在見聞記を著わして注目を浴びたポンペ[(2)]であったかもしれない。

いずれにせよ，日本の開国によって，一九世紀後半にアジアではじめて，近代国家が出現することになるのであるが，安政のいわゆる不平等条約をめぐって，開国派と尊王攘夷派とのはげしい対立，幕閣を中心とする攘夷派にたいする徹底的な弾圧と，京都朝廷と薩摩・長州を中心とする倒幕勢力のはざまで，次第に覇権を喪失していく幕府はついに崩壊し，まさに息づまるような一五年間ののちに，日本は近代化の夜明けを迎えるのである。

嘉永六（1853）年六月，ペリー提督の率いるアメリカ合衆国艦隊による使節としての来日，つづいて，翌嘉永七（1854）年正月，国交を求める大統領の親書にたいする回答を求めてペリーの再来日，これらの過程を通じて幕府為政者や知識階級は，外交（diplomacy）の何たるかを知った。同時に，この大事件の勃発によってはじめて国論が沸騰し，ここにはじめて，「攘夷か開国か」という問題が世論として幕末の社会を根底から震撼したのである。

いまや幕末の歴史研究の古典的著作となっている『幕末外交談』の著者田辺太一（もとかず）は，一八歳にして昌平黌へ上り，幕末のなかでも俊才の誉れ高い人物であった。本書の書き出しは，ペリー提督の来航から始まるが，この時彼は二二歳であった。安政三（1856）年，米国総領事ハリスが渡来し，同五年に列国との間に通商条約が結ばれたが，著者田辺が当時の外国奉行水野筑後守忠徳の知遇をえて，外国方に出仕するようになったのは，二八歳のときであった。彼は，すでに末期的症状を呈していた幕府権力の実相を目撃したひとりで，この著作そのものは，明治三一（1898）年に出版されたものであるが，当時の政治的雰囲気を生々しく描写している。

田辺は，ペリーとの交渉の責任を負って幕政を開国の方向へ転換した当時の老中首座，阿部伊勢守正弘を，英邁な政治家として評価しながらも，つぎのような感想を書き記している。

（2）『ポンペ日本滞在見聞記――日本における五年間――』，沼田次郎・荒瀬進共訳，雄松堂出版，昭和五九年，を参照。

「これによって推察すれば，ペリーが再来したとき，幕府に定見と定力とがあったならば，速かに彼の請いを容れて，開国の国是をさだめ，天下の人心を一新させることは，一紙の布令をもつて成しとげることができたかもしれない……。

幕府は腐儒俗吏の論に動かされて，みずからこれを断行するだけの勇気がなく，これを衆議に問うて，他からこれを言いださせようと思った。そこで，我慢にも自己の強をよそおい，未練にも自己の責をのがれようとして，朝廷奉上，諸藩諮問という，善巧の方便をこころみようとしたようだ[(3)]」。

この文章は，たしかに未曾有の難局に臨む幕府首脳の不決断と責任逃れを物語って余すところがないが，彼はさらに，それをつぎのように要約する。「ただ，自己の強をよそおわんとする我慢(我意)，責任のがれようとする未練，この二つの邪心のために，期待と全く反対の結果を生じ，かえって幕府の弱体を示し，責めを重くするに至ったのであるが，それは当然の結果であろう[(4)]」。

だが，この著者の主張はむしろ逆で，「幕府有数の良宰相ともいうべき阿部正弘」をもってしても，自己の責任で決断しがたく，衆議にはからなければ行動できないほど，幕府権力が衰えていたと解釈すべきである。ただ，重要なことは，黒船来航を契機として，国の運命にかかわる重大な問題については，親藩・譜代をはじめ，諸大名に意見具申を許可したことは，幕権の失墜につながる政治上の慣行の重大な変更であると同時に，わが国歴史上はじめて，世論（public opinion）という新しい現象を出現させたことである。

一体，世論は何であろうか。世論というものは，いつ，どこにまたどのような時代でも，必ず存在しうるものではない。世論形成には，いくつかの基本的な条件が必要である。まず第一に，その社会の指導的な階級の間に，ある程度の言論の自由が確保されていなければならない。第二に，支配的な意見を一国の内部で伝達させる交通・通信の手段が発達していて，民衆がこれらを利用しうること，そして世論を支える結社や知的集団がある程度発生し，大衆に影響をあたえ，あるいは啓蒙する能力をもつことなどであろう。

ウォルター・リップマンは，第一次大戦後に書かれた著作『世論』のなかで，第一次大戦の経験に照してつぎのように主張している。

「ほどほどに安定している時代には，世論を象徴するものですら，点検・比較・論議の対象となるのを免れない。言いかえれば，それらは現れたり消えたり，融合したり忘れ去られたりするものであって，けっして集団全体の情動を完全に統合するものではない。結局のところ，全国民が神聖な合一に達する行為は，人類に一つしか残されていない。それは，戦時の中盤において，恐怖と好戦心と憎悪がほかのいっさいの本能を砕くか，其の力を借りて，精神を支配する力を完全

（3） 田辺太一『幕末外交談』，坂田精一訳校註，平凡社，東洋文庫，1982年，12頁。
（4） 上掲書，14頁。

に掌握したときに発生するのだ……」[5]。

黒船の来航は，幸いにして戦闘行為を伴わなかったけれども，異国の巨大戦艦を前にして，江戸を中心とする民衆の心理的動揺はいちじるしく，支配者を狼狽させ，まさにリップマンが説くように，「戦時の中盤において，恐怖と好戦心と憎悪がほかのいっさいの本能を砕くか，其の力を借りて，精神を支配する力を完全に掌握した」情況を出現させた。攘夷論あるいは尊王攘夷のイデオロギーは，まさにこのような情勢を背景として，世論となったのである。

「開国か攘夷か」をめぐって，幕閣を中心とする支配者ならびに諸大名の間で，はげしい意見の対立がみられたが，開国は世論となることができず，攘夷が，圧倒的な世論たりえたのは，何故であったろうか。その理由として大きく，二つの事情が考えられる。ひとつは言うまでもなく，二七〇年余にわたって，世界史上類例をみない鎖国政策――とはいっても，ヨーロッパ諸国のうちではオランダを例外として，また朝鮮および中国というアジアの隣国は交易を認められていたが――をとり続けてきたため，国民意識のなかに外国人にたいする違和感や恐怖心が定着し，次第に排外主義に転化していたことが考えられる。従って，尊王攘夷の思想が，世論として幕末の武家社会を覆う以前にすでに，ひろく国民感情として，国学的思潮などの影響と相まって，外国人を夷狄と考える発想が，蘭学者に代表される少数の洋学者を除く多くの知識人に，浸透していたということである。

つぎに，幕府が外国勢力の圧力におされる形で，開国政策にふみきり，祖法といわれたほどの重みをもつ鎖国政策の継続を断念したことは，それ自体，外圧による消極的な対応策で，開国政策のもつ積極的な意義がどこにあるかを，充分に説得し，国民に納得させることができなかった。幕府為政者の政策的な破綻は，嘉永年間に入って，鎖国政策継続の可能性が，ヨーロッパを中心とする外国勢力の軍事的・経済的圧力によって失われつつあることを認識しながら，開国のための準備を怠っていたことである。『鎖国』の著者和辻哲郎は，第二次大戦の敗北についての反省の上に立ってつぎのように書いている。

「合理的な思索を軽蔑して偏狭な狂信に動いた人々が，日本民族を現在の悲境に導き入れた。が，そういうことの起こり得た背後には，直観的な事実にのみ信頼を置き，推理力による把握を重んじないという民族の性向が控えている。推理力によって確実に認識せられ得ることに対してさえも，やってみなくてはわらかないと感ずるのが，この民族の癖である。それが浅ましい狂信のはびこる温床であった。またそこから千種万様の欠点が導き出されてきたのである」[6]（傍点は著者のもの）。

（5） Walter Lippman, Public Opinion, New York, 1922. W・リップマン『世論』（上），掛川トミ子訳，岩波文庫，1987年，34頁。

（6） 和辻哲郎『鎖国』，（岩波文庫版上下，1982年）但しここでは『和辻哲郎全集』第十五巻，1975年，15頁。

この指摘は，現在の日本の政治について，もっともよく妥当するが，幕末開国時の為政者の態度についてもあてはまる。すでに1843（天保一四）年，オランダ国王ウィレム二世は，将軍家慶に書翰を送り，鎖国は到底維持しえず，開国が避けることのできない情勢となりつつあることを説得し，これを聴き容れない幕府にたいし，翌弘化元年，オランダ政府は，軍艦を長崎に派遣，重ねて開国を勧告する国書を長崎奉行に手交した。オランダ政府は，日本が，欧州列強の武力によって開国を迫られることによって，長年にわたってつづけられてきた日蘭の貿易関係が，根底から打撃をうけることを何よりもおそれた。(7)

逡巡をつづける幕府にたいし，1852（嘉永五）年八月，オランダ商館長ドンケル・クルチウス（Jan Hendrik Donker Curtius）は，バタヴィアのオランダ総督の書簡を幕府に提出，翌1853年，アメリカ軍艦が日本に来航し，通商条約の締結を要求することを告知し，その前に日蘭通商条約の締結を求めた。幕府はこの場合にも態度を明確にせず，徒らに時を費した。アメリカ艦隊の来訪は，一年前に既に幕閣に情報として知らされていたのに，開国にたいし，何ら具体的な方策が打ち出されなかった。

このように，幕閣を中心とするきわめて少数の為政者が，情報を独占して一般に開示せず，眼前に黒船が出現してはじめて事の重大さを知り，対策を打ち出そうとしても，開国という幕府の方針が，尊王攘夷という澎湃として沸き上った世論にたいして，対抗しえなかったのは当然であった。伝統的に祖法として墨守されてきた鎖国政策を，黒船の来航を理由に抛棄することは，ただ外圧のみによって，国の政策の基本を揺り動かすこととなり，いわゆる大義名分に欠ける態度として考えられたのである。

要するに，「何のための開国か」，世界の大勢は，「日本の孤立化を容認しない」，という有力な根拠はあるにしても，それはいわば消極的な理由で，何を意図して開国をするのか，たとえば，やがて明治新政府の政治的スローガンともなった「富国強兵」というような，一般に理解し易い目的が，開国そのものの積極的な理由として掲げられなければならなかった。だが，幕閣の政治的姿勢は，徳川幕藩体制の維持という一点に収斂されて，黒船来航は，いわば国難で，開国はまさに，徳川政権の存続のためと考えられるに至った。幕府権力が日に日に失墜しつつあるときに，この幕府を支えるかにみえる開国政策が，パブリック・オピニオンになりえなかった理由は，容易に理解できよう。しかも，尊王攘夷が，パブリック・オピニオンなりえたのは，一般大衆に漲る排外的感情と，京都朝廷の排他的な公卿意識が強力に結びついた結果であった。

幕府の開国政策が，朝廷の勅許をえないまま，通商条約がアメリカ合衆国をはじめ，欧洲列強六ケ国との間に結ばれるという形で決着を迎えながら，江戸を中心に外国人排撃が昂まる世論のなか

（7） この点については，拙著『英国外交官の見た幕末日本』吉川弘文館，1995年，において，詳細に論述した。同書9頁以下参照。

で，これを強力に取締ることのできない幕府の態度に，駐日公使ラザフォード・オルコック（Rutherford Alcock）は，次第に猜疑の念を濃くしていった。条約締結が為された1858（安政五）年から，三年近くたって，幕府の「開国政策」が何故にパブリック・オピニオンになりないのか，彼は，「ミカド」について，その存在こそが，その真因に深くかかわっていることを幕閣から知らされたのである。本国の外相，ジョン・ラッセル卿にあてて，つぎのように書いている。

「外国係閣老は，ごく自然にミカドとの間に横たわっているさまざまな関係について，とくに日本人にとって，非常に微妙な，意外な新事実の暴露とも思われる問題にもふれました。ミカドこそは，彼らの皇帝で主権者であるというのです[(8)]」。

一体，そのミカドなる存在は，日本人にたいして，具体的にどのような影響と支配力をもっているのか。彼は，フランス公使ド・ベルクール（P. du Chesne de Bellcourt），オランダ公使ド・ヴィット（de Witt）らと情報を交換しながら，「日本人の間から秘かに集められた情報」として，つぎのように本国に送っている。

「つぎのように言われています。すなわち，聖職者や下層武士（priests and man of low degree）は，往古の法律や政治制度への復帰と，さらに，最近のあらゆる条約は，この古代の法と矛盾するものであるという決意の下に団結しております……。しかも噂によれば，外国人の生命をつけ狙うこれらの陰謀家たちは，『もし，外国人の虐殺の結果，外国勢力との関係に決裂がおこるような事態となれば，その時こそ昔からの攘夷体制が復活し，日本帝国は繁栄する』というのです。そしてこのような愛国的な使命の遂行のためにこそ，身を鴻毛の軽きに比すべきだと考えるのです[(9)]」（no risk to life, they conceive, is deserving of a moments' thought）。

隠然たる影響力を行使するミカドの存在が，明らかになったとすれば，政治権力の執行者としての幕府と，ミカドの砦ともいうべき朝廷との関係は，どうなるのか。

「この国では，政治の執行部は，表面的には，大君と二つの国家評議会（a Tycoon and two Councils of State）だけから成っています。とくに前者は，五人の閣僚で構成され，議長（プレジデント）として活動するそのひとりは，収入や領土にかんしては，第三ないし第四級程度の大名にすぎない[(10)]」。

こうした政治の実権を掌握する幕閣について，オルコックの描写は比較的正確であるが，ミカドについては，漠然としたつぎのような叙述で語られている。

「しかしながら，やや曖昧なしかも薄暗い輪郭しか浮ばないのですが，彼ら幕閣の背後に，実体は確かなものであるにしても，何か神秘の霧に包まれて，この国の唯一人の，正式に認められた君主「ミカド」が，天の御子（みこ）として（heaven-born existence），あらゆる高徳の，神の子孫とし

---

(8) Rutherford Alcock to Sir John Russell, August. 16th 1861. F.O. 46-13, p. 60.
(9) Ibid., p. 80.
(10) Ibid., p. 99.

て君臨しており，彼は余りにも神聖であるため，彼の宮廷以外の俗世界では，仰ぎ見ることができないというのです[11]」。

おどろくべきことに，オルコックの幕末の朝廷および天皇の神格化された存在についての認識は，第二次大戦に至るまでの日本国民の皇室観そのものであるという事実である。幕末，徳川政権の政策的失敗，すなわち，幕藩体制の悲劇は，すでに世論として国論を支配しつつった尊王攘夷思想が，神秘的な天皇制という実在を背景に，その開国政策に対峙し，やがて，尊王攘夷という世論は，倒幕計画と結びついて，尊王倒幕のイデオロギーに利用されるところにあった。

(二) 開国政策と尊王攘夷をめぐって

尊王攘夷のスローガンが，幕末期を支配する圧倒的な世論となり，やがて倒幕のイデオロギーと化したのにたいし，開国の主張は，幕府権力の外交政策の中核であったにもかかわらず，有力な世論となりえなかったのは何故か。オルコックも指摘しているように，幕末の朝廷は，神秘の扉で鎖され，そこでは平安朝以来の故事来歴がそのまま踏襲され，天皇はまさに，そうした因襲と慣行のなかで，からめとられていたということができる[12]。

後に，旧幕臣，渋沢栄一等は，一五代将軍徳川慶喜の伝記編纂を志し，そのための史料作成のため，明治四〇年七月，編纂員は，慶喜公を訪問，いわゆる口述筆記の形で，彼の談話をとりまとめた。この任に当った人々の，この会を慶喜みずから昔夢会と名づけ，その談話史料を，『昔夢会筆記』と名づけ，やがて公けにされた。「片言隻句をも記録した」この史料が，今日，貴重であることはいうまでもない。そのなかで，孝明天皇についてのべられたつぎのような件(くだ)りがある。

「萩野　攘夷ということにつきましての真の叡慮というものは，いかがでございましょうか。

公　先帝（孝明天皇……引用者註）の真の叡慮というのは，誠に恐れ入ったことだけれども，外国の事情や何か一向，御承知ない。昔からあれは禽獣だとか何とかいうようなことが，ただお耳にはいっているから，どうもそういう者のはいってくるのは厭だとおっしゃる。煎じ詰めた話が，犬猫と一緒にいるのは厭だとおっしゃるのだ……[13]」。

側近の鷹司関白からして，慶喜公がいろいろ西洋の事情，蒸汽船の発達や大砲などの進歩について説明して，「それで大方おわかりになったと思っていると，いや日本には大和魂というものがあるから，決して恐れることはない」。このような側近に囲まれて日常を過す天皇が，迷信のとりこ

---

(11) Ibid., pp. 99～100.

(12) これについては，下橋敬長著，羽倉敬尚註『幕末の宮廷』平凡社，東洋文庫，353頁，1985年，が有益である。なお，W.E. グリフィス著『ミカド――日本の内なる力』，亀井俊介訳（William Elliot Griffis, The Mikado : Institution and Person, 1915）岩波文庫，1997年，を参照。

(13) 渋沢栄一編，大久保利謙校訂『昔夢会筆記―徳川慶喜公回想談』平凡社，1966年，162～163頁。

となり，外国人嫌いとなって，ついに狂信的な攘夷主義者に利用されたことは充分に考えられる。

このような朝廷の雰囲気を背景に，薩摩・長州あるいは水戸藩の下級武士を中心とする攘夷主義者，そしてさらにいわゆる草莽（そうもう）といわれた民間の志士や浪士たちの排外主義的な運動は，1858（安政五）年，幕府が日米修好通商条約の締結を勅許を待つことなく断行したことにより，一層昂まった。外国の圧力により，開国にふみきらざるをえなかった幕府は，このような情勢の下で，攘夷主義者にたいして徹底的な弾圧の態度をもって臨まざるをえなくなった。大老井伊直弼の苦悩は，圧倒的な尊王攘夷の世論と化した大勢に，開国政策をもって対抗しえず，苛酷な圧制と刑罰をもって言論を封じ込めようとしたところに，無理があった。(14) その意味で，井伊の政策は，ペリーの来航を迎えて開国を決意した福山十万石の領主，阿部伊勢守正弘の対策とは，根本的に異なっていて，まさに対照的であった。

阿部正弘が，幕末における偉大な政治家のひとりであった所以は，国歩艱難ともいうべき危機に際会して，これらの諸々の難局に，幕府として如何に対応すべきか，諸大名はもちろん，幕府諸有司，さらに無役の幕臣，陪臣および浪人に至るまで，その意見を幕府に上申することを許したことである。

このことは，封建的身分秩序と矛盾する行為ではあったが，すでに指摘したように，開国に向けての世論形成を決意した阿部にとっては，勇気ある決断であった。不幸にして，世論形成は幕府の政策に逆行し，攘夷主義が支配的な世論となったが，しかしその攘夷思想もしくは尊王攘夷のイデオロギーにしても，実は複雑な色彩を帯びていた。

幕府に提出された多数の意見書の内容は，多岐にわたっていたが，そのなかでもっとも優れていたものこそ，勝麟太郎（海舟）の提案であったといわれる。その要点は，（一）幕府役人の人材の登用，（二）軍艦の建造着手，（三）江戸防備の措置，（四）兵制の改革，教練学校の建設，（五）近代的な武器の製造等，であった。(15) 言うまでもなく，これは開国を前提とした意見である。

この勝海舟の意見具申に代表されるように，世界の大勢上，開国はやむえないとする「開国派」，開国は当面やむをえないが，武力を整備して，外国に対抗しうるだけの国力を充実させる時期が到来した場合には，旧来の鎖国政策に復帰するとする「条件づき開国派」，そしてさらに理由の如何を問わず，開国は拒否し，伝統的な鎖国政策を固守する絶対的な鎖国派，幕閣をはじめ，有力な武家社会は，大体以上の三つのグループに分かれていた。尊王攘夷の思想を，幕末にもっとも支配的な世論とするのに与って力あったのは，徳川親藩御三家のひとつ，水戸藩であった。水戸藩は，実にこの絶対的攘夷派の本拠で，幕末における幕府政策の変遷を辿るためには，水戸藩の動向を無視しては考えられない。(16)

---

(14) これについては，吉田常吉『井伊直弼』吉川弘文館，平成四年，が有益である。

(15) 松浦玲『勝海舟――維新前後の群像』，中公新書，1980年，40～42頁をみよ。

(16) これについては，山川菊栄『覚書―幕末の水戸藩』岩波書店，1977年，が興味深い叙述を含む。

しかし水戸藩の政策ともいうべき絶対的攘夷主義は，明確で理解し易いが，同時に，幕府外交政策の基本が，「条件づき」とはいえ開国政策にふみきった以上，幕府との確執が深まるのは避けられなかった。きわめて複雑な立場に立たされたのは，大老井伊直弼で，その態度について，福地桜痴は，つぎのようにのべている。

「若(もし)それ，其心中には断然たる開国の国是を懐き，其施政に方針の歩を進めつゝ，且つ朝廷および輿論の激昂を鎮めんが為に，鎖攘の語気を利用して一世を籠絡せんと謀りたる程の権謀あらば，井伊大老は天晴(あつぱれ)なる政治家と称せらるべきの価値ありと雖ども，決して左迄(さまで)の識見智略を具せる宰相には非ざりしなり。折々幕府が，『外交は其欲せざる所なれども，勢いに迫られて姑(しばら)く和するなり。他日，兵備充実せば，攘夷して原(もと)の鎖国に復すべし』とは，嘉永六年米国全権ペルリ渡来せし時に当りて，阿部伊勢守が宣言したる所にして，阿部は実に其然(しか)く行はれん事を望みたるに外ならず」(17)。

ここで問題となるのは，青年から壮年にかけて徳川幕府の瓦壊を身をもって体験した福地の見解が，井伊大老と阿部伊勢守と同列におき，ひとしく「条件づき開国派」として位置づけていることである。だが，伊勢守は，「開国やむなし」として，開国政策を世論として定着させようと試みて失敗したのにたいし，井伊は心底より，条件づきの開国論を主唱し，福地も言うように，「仮令，一旦条約に調印して国を開くとも，他日兵備充実せば，外夷を斥(しりぞ)けて国を鎖すに於て何かあらん」という攘夷主義者であった。すなわち，世論の形成および誘導という点では，阿部と根本的に所信を異にしていた。してみると，開国を世論として定着させることは望まず，さりとて攘夷を国の政策の基本にすえることはできないという，きわめて不徹底な態度をとらざるをえなかったのである。井伊は，ひとたび阿部伊勢守によって切り拓かれた世論形成を無視し，ひたすら，幕府維持のため，独裁的権力の行使のみに依存することとなった。安政の大獄は，かくして惹き起されたのである。

安政五（1858）年秋，時あたかも福沢諭吉が藩命により，築地鉄砲州の奥平藩中屋敷において，蘭学塾を開くため，江戸に下向した頃であった。ここで見られた幕末の風景は，おそらく，京都朝廷も未だかって想像しえなかった程，酷烈なものであった。繰り返すが，井伊大老も信条としては，絶対的攘夷主義者であったが，政策的には阿部伊勢守に劣らず「条件的開国主義者」，すなわち鎖国を国是としてきた日本にとって，開国は必ずも最善の策ではないが，いわゆる外圧による国際情勢の変転に伴って孤立化は不可能で，建前は，開国はやむをえないとする条件づき開国派であった，ただ阿部と異るところは，その開国策は，心底からのものではなかったということである。

阿部は，この方針に沿って，ひろく身分や門地を問わず，大衆的な意見愚見を認めた上で，国家政策の遂行上，必要な世論形成を試みた異色の政治家であった。不幸にして下田条約調印の直後，安政四（1857）年六月一七日，病没，複雑な経緯をへて，彦根藩主井伊直弼が大老に就任した。こ

---

(17) 福地桜痴（源一郎）『幕末政治家』平凡社，東洋文庫，1989年，120頁参照。

れより先，阿部は，下総佐倉藩主堀田正睦（まさよし）を老中首座に推薦したが，時局の重大化に伴い，従来の慣例を破って，大老職に親藩の越前藩主松平春嶽（慶永）を推挙しようとする動きをみせた。この背景には，彼が阿部正弘の在世中から，幕閣にたいし，将軍家定の後嗣として，当時，英明の聞え高かった一橋慶喜が適任であることを訴え，徳川家門という責任感から，慶喜を徳川第一四代将軍とすることに，政治的生命をかけようとしていたという事実がある。安政三年九月頃であった。(18)

しかし慶喜は，水戸徳川斉昭の第七男であるところから，閣老の一部から，斉昭の幕政への関与を憂える勢力と，将軍家定の生母本寿院を中心とする大奥の反対があり，一橋慶喜の将軍擁立は困難な情勢となった。春嶽は，慶喜擁立のために，あらゆる手段を行使したが，その行動の基本は，二つに分れた。ひとつは，朝廷にたいし国内外の危機的情況を訴え，将軍継嗣として慶喜が適任であることを，叡慮（えいりょ），すなわち天皇の意志として幕府に告知せしめること，いまひとつは，一橋慶喜の擁立を支持する越前および水戸徳川家を中心に，薩摩の島津斉彬（なりあきら），宇和島の伊達宗城（むねなり）および土佐の山内容堂等が連合し，幕閣に迫ること画策したことであった。しかし安政五（1858）年，四月，老中松平忠固（ただかた）等の推挙により，井伊直弼が大老に就任したことによって，慶喜の擁立は絶望的となった。

井伊が大老就任当時，外国係閣老として，アメリカ合衆国全権公使タウンゼント・ハリス（Townsent Harris）と条約締結交渉に従事していたのは，堀田正睦であった。井伊大老を中心に，幕府閣老は例外なく，条件づき開国派であったことはすでに指摘したが，最大の困難は，迷信と因襲に固まっていた京都朝廷および孝明帝の外国人嫌いであった。もはや朝廷の意志を開国に傾けさせることの不可能なことを認識した堀田は，安政四（1857）年，下田を出発したハリスを十月二六日，江戸城において将軍家定に謁見させた。このときのハリスの演述書を閣老および諸大名に示し，一一月一五日，意見を徴すると同時に，ハリスとの間に条約草案の逐条審議が開始された。(19) と同時に幕府は，一三日，米国との間に通商条約を締結すべき旨を朝廷に奏聞，他方，同月二九日，堀田正睦は，外国事務取扱閣老として，以後，年末に至るまで将軍家定の面前において，幕府重役をはじめ譜代大名に，条約締結にともなう国際貿易開始の，やむをえない事情を演説，極力，説得に努力し，大勢として諸大名の了解は得られたと解釈した。すなわち幕府の政権担当者をはじめ，外交政策に関係ある有識者の間では，「開国はやむをえない事態である」という見解が，支配的な世論となっていたということができる。

以上のように，幕府を中心とする関東での世論形成と推移にたいして，この情勢を朝廷に説明し，

---

(18) この時期の時代的背景については，川端太平『松平春嶽』吉川弘文館，平成二年，94頁以下，によるところが多い。

(19) カール・クロウ『ハリス伝――日本の扉を開いた男』田坂長次郎訳（Herbert Carl Crow, He opend the Door of Japan, 1939.）平凡社，1979，「二十二章　条約作り，イバラの道」を参照。

条約締結の勅許奏請のため，老中首座堀田閣老が上京することとなった。その際，川路聖謨(としあきら)および岩瀬忠震(ただなり)が随行を命じられたが，堀田閣老が上京の途についた安政五年正月二一日の十日前にすでに，日米通商条約は，逐条審議を完了していた。

従来の慣行からして，いかに重大な国際的な条約であるにもせよ，その意図が明白である以上，勅許が下されることを信じて疑わなかった幕府は，金銀などの贈与，いわゆる賄賂など，あらゆる手段をも使って，条約勅許を要請した。しかし前関白鷹司政通を通じての主張にもかかわらず，翌正月二三日，堀田閣老にたいし，「三家以下諸大名の衆議を徴した上にて，勅裁あるべし」との勅諚が下った。これは，条約勅許の要請にたいする否定的態度の表明か，あるいは少なくとも回答留保の姿勢というほかはなかった。「三家以下諸大名」という表現は微妙である。明らかにここには，「条件づき」とはいえ，開国を拒否しようとする絶対的攘夷派の主唱者徳川斉昭の意向が，もりこまれていることが感じられよう。

ただ，絶対的攘夷派とはいえ，国を全面的に開放して，自由に国際貿易を行い，外国人の渡来および居住を許すことには反対であるが，1825（文政八）年の，諸大名にたいし，異国船の無条件の打ち払いを命じた，いわゆる「無二念打払い」の政策に還るのではなく，1842（天保一三）年の，「異国船討払を止め，緊急やむをえない場合，薪炭食料の給与を許す」という段階にとどまることを意味していた。しかしこのような水戸藩の主張も，情勢の変化によっては，充分に動く可能性を秘めていた。というのは，幕府が早急に解決すべき問題として，この条約勅許の問題とともに，病弱な一三代将軍家定の後嗣を誰にするか，「一橋慶喜か紀伊の慶福(よしとみ)か」という，徳川宗家の将来にかかる課題が浮上していたからである。

すでに考察したように，「開国は国際情勢の変化もあり，やむをえない」とする条件づき開国派，すなわち，いつの日にか，西欧列強に対抗しうる程に軍備および国力が充実したときには，再び鎖国政策に立ち返る，という意見が，諸大名の間で支配的であったとすれば，この「条件づき開国」の主張は，幕閣および大名そして有識者の世論であったということができる。してみると，徳川斉昭を中心とする水戸藩もしくは水戸学の思想の上に立つ絶対的攘夷派ないし非開国派は，異端であるかといえば，必ずしもそのように断定しえないところに，幕末政治史のむずかしさがある。簡単に要約すれば，政治の衝に当る政権担当者としての幕府閣老をはじめ官僚有司および有力な開明的諸大名の間では，「条件づき開国」は，有力な世論となっていた。たが，政権から疎外され，国の運命について関心を抱くことを禁じられていた京都朝廷はもちろん，一般の武士層や大衆にとっては，伝統的な鎖国政策こそ，世論であった。

しかも，勅許をへないで条約を締結したという事実が判明するにつれて，圧倒的な世論となった攘夷思想は，尊王と結びつき，尊王攘夷として，いちじるしくイデオロギー的様相を呈し，そしてやがて尊王攘夷のイデオロギーに転化するのである。その代表的なひとりが吉田松陰で，彼の立場からすると，開国の主張は，客観状勢の上から，やむをえない措置として理解されるとはいえ，消

極的で，幕府の政策の中核的事項でありながら，四囲の情勢からする妥協としか考えられなかったのである。

開国をめぐって，幕閣を中心とする政権担当者と政治から疎外されていた武士層や一般大衆の世論との間に，超えがたい深淵が横たわっているように，将軍継嗣問題についても，政権担当者ないし幕閣内部における対立抗争は，深刻であった。勅許をまたずに日米通商条約に調印した幕府の行動を，違勅行為として糾弾しつつ，一橋慶喜の将軍継嗣としての資格を，天皇の内勅により実現しようとする水戸派，一方，大老井伊直弼を中心とする幕閣は，将軍家定との血統上の関係から紀伊藩徳川慶福を立てようとしていたが，この相互にはげしく抗争する両派にとって，徳川宗家を中心とする封建的な幕藩体制の護持が，至上の目的であることには変りはなかった。ただ異なるところは，水戸藩が，あくまでも朝廷を立て，尊王の大義名分の下にレーゾン・デートル（raison d'être）（存在理由）を獲得しようとしたのにたいし，幕政の担当者は，徳川の政権体制を古典的な形で維持存続させようとする保守派であった。そして前者の哲学は，水戸学[20]であり，後者は朱子学であった。同じく幕藩体制の強化を目指しながら，幕政を改革して，国民国家的な構想を志向しつつ，一橋慶喜擁立に全力を傾けたのは，越前藩主松平春嶽（慶永）であり，新しい時代を切り開くべく登用したのが，橋本左内と横井小楠であった。

---

(20) 一九世紀初頭，文化，文政の時代に入って，アメリカやロシアなどの諸国の船舶が日本の近海に出没する過程（たとえば，享和三（1803）年アメリカ船が，交易を求めて長崎に来航，文化元（1804）年にロシア使節レザノフは，長崎に漂流民を護送，貿易を求めた）で，とくに水戸藩では，その長い海岸線の防護もあり，内憂にたいする外患が，大きな問題として注目されるに至った。藤田幽谷の『勧農或問（かんのうわくもん）』は，農政を「内憂外患」に対処するための最も基本的な政治として重視していたといわれる（小室正紀『草莽の経済思想――江戸時代における市場・「道」・権利』，御茶の水書房，1999年，200頁）。商人資本の成熟と商品経済の進展に伴って，幕藩体制を危機におとしいれつつある鋏状価格差の拡大，すなわち米遣いの経済の上に寄生している封建領主および武士階級にとって，諸物価の上昇は，彼等の生活を危機におとしいれつつあった。その解決策として，藤田は，「領内一円総検地」を提唱した。これによっていわゆる隠し田を摘発し，藩財政の建て直しを行おうとする政策で，小室氏は「藤田派農政論は，具体的な政策内容としては，封建反動の性格を持つものであり，しかしそれにもかかわらず同時に藤田派農政論は，農政を通じて，上から国民の一体性を作ろうという意図を持ったものであり，前期的な国民主義の一形態であった」という（前掲書二〇四～二〇五頁）。

してみると，水戸学の思想として尊王攘夷における尊王とは，解体の兆しをみせはじめた幕藩体制を，国民国家的に再編成し，幕権の強化存続を意図し，世界史的にみれば，封建制の最後段階ともいうべき絶対王政を志向したものであった。その意味では，松平春嶽の一橋慶喜擁立の運動は象徴的で，対極に立つ井伊直弼は，幕藩体制の危機ではなく，徳川家の危機として捉え，危機意識の点で全く認識を異にしていたといえよう。

（三） 志士と洋学書生――同世代人としての松陰と輸吉

幕末に代表する思想家の条件として，尊王攘夷の志士，あるいは開国論者というだけでなく，その思想形成の上で，日本の将来にどのような国家形態を構想していたのか，が問題となろう。その点で，松陰の思想と行動は，もっとも注目に値する。

松陰は天保六（1835）年，養父，吉田大助の死去に伴い，吉田家を嗣ぎ，家学としての砲術師範の役職を命じられた。[21] 志士松陰の生涯は，毛利家の砲術師範の養子となったことによって規定され，その生まれた時代が，天保時代の幕明けであったことによって，決定的な影響をうけた。すなわちヨーロッパでは，1830年，七月革命に象徴される政治的変革の嵐によって，激しく揺れ動いた時期で，わが国にも，その波動が打ち寄せつつあった。天保八（1837）年，大坂町奉行所与力で，著名な陽明学者，大塩平八郎が，幕政を批判して叛乱をおこしたこの年，アメリカ船舶モリソン号が浦賀に入港して通商を求めたが，幕府はこれに砲撃を加えて撃退した。このような幕府の対外政策に衝撃をうけた渡辺崋山は，『慎機論』を書いて，幕府の鎖国政策を批判した。これにたいし，幕府は天保十（1839）年，崋山を蟄居，高野長英を終身禁獄に処し，小関三英を自殺に追い込んだいわゆる蛮社の獄をひきおこした。そして翌天保一一年，清国と英国との間に阿片（あへん）戦争がおこり，一三年，清国は敗北して南京条約を締結，広東，厦門（あもい），福州，寧波（にんぽう）および上海の五港の開放と香港の割譲を強制された。松陰一二歳の頃である。

こうした時代的背景もあり，彼が砲術師範という役職と家学の家を相続したことは，学問に対する情熱はもちろん，海外事情にたいする鋭い認識を抱かせることとなった。何よりもまず，松陰の学問的教養の基礎は，天保一三年に叔父玉木文之進が起した松下村塾に入り，教育をうけたことに始まる。すでにこれより早く，天保九（1838）年，年九歳にして家学教授見習として，藩校明倫館に登り，やがて天保一一年，一一歳のとき，藩主毛利慶親の前で初めて『武教全書戦法篇』を講じ，天保一三年には，再度，『武教全書』を藩主の前で講述して感銘をあたえた。[22]『武教全書』は，山鹿素行の著作で，松陰の藩主面前での講演は，戦法篇が天保一一年，一一歳の折りに，用士論は嘉永二（1849）年，つぎに守城篇については，翌三年八月二六日にそれぞれ行われた。とくに藩主毛利慶親を感動させたのは，守城篇の講述のなかで，「籠城之大将心定之事」のところ，「籠城ノ大将ハ心定マラズシテ叶ハズ，若シ大将一心ウカウカスルトキハ，其下ノ諸将何程智勇アリテモ，智勇ヲ施スコト能ハズ，百万ノ剛兵義士アリト雖ドモ，剛義ヲ施ス能ハズ……」[23]という一節について，松

---

(21) 山口県教育会編集『吉田松陰全集』第一巻，昭和十一年，三～三四頁参照。
(22) 前掲，第一巻，二一九頁。
(23) 前掲，第一巻，二三一頁。

陰の講説が，このなかでいわれる大将を，恰も藩主毛利慶親自身であるかの如く，「籠城ノ大将心定之事」とあるのを，心定の上に御の詞を加えて，御心定とし，藩主みずから大将として戦場に臨むかの如く，いわゆる臨場感をこめて講述したことが，藩主はじめ出席者に感動をあたえ，若干二一歳の青年とは思えない老成した姿であったという。(24)

早熟の俊才として，周囲から高く評価された松陰は，藩主の文学親試および武教全書の講述を終えると，その識見をひろめるため，八月二五日，萩を発して九州に遊び，一二月二九日帰宅したが，この間，小倉，佐賀，大村，長崎，平戸，天草，島原，熊本，柳川および久留米を訪ね，とくに平戸には兵学家葉山左内，山鹿萬介について学んだ。とくに長崎でオランダの船に上り，また熊本では後に同志ともなった宮部鼎蔵と知り合ったことは，長崎や各地での交友と見聞を通じて，海外の事情に接する機会をえたこととともに，大きな収穫であった。しかしそれにもまして，彼の青年としての野心を刺激したのは，嘉永四（1851）年三月，兵学研究のため，藩主に随行して江戸の土をふんだことであった。勤王の志厚い松陰は，途中，楠正成の墓を詣でて，感激しているが，何よりも感動的であったのは，四月九日，江戸着，間もなく，安積艮斎，古賀茶渓，山鹿素水および佐久間象山（しょうざん）などの碩学に会ったことである。なかでも一代の英傑象山に会って，その門下に加えられたことは，彼の生涯を決定的にさせる転機となった。

江戸は当時，情報の中心であり，とくに尊王攘夷運動の発祥地ともいうべき水戸に近いことが，彼を刺激した。まず年来の親友宮部鼎蔵等と東北旅行を企て，嘉永四（1851）年，水戸を訪問，会沢正志斎に会っているが，藤田東湖には会えなかったらしい。(25) 江戸時代の知識人は参覲交代の機会などを利用して各地を旅し，見聞を拡めたものであるが，松陰は，その代表的なひとりであった。彼の行動はしばしば衝動的で，たとえばこの年，東北諸国の遊歴許可を藩から得ていたにもかかわらず，過書，今日言うところのパスポートが下付されるのを待たずに藩邸を出奔，亡命の形をとって東北諸国を変名を使って旅行し，新潟から佐渡に渡った。その後，秋田をへて，弘前，青森，盛岡，仙台，米沢などを遍歴，嘉永五（1852）年四月十日藩邸に帰り，待罪書を提出した。

藩は，一二月九日，亡命の罪を以て士籍を削り，世録を奪って，実父杉百合之助「育（はぐく）み」とした。ただ同日，彼の友人，来島良蔵，小倉健作，宍道（ししど）恒太および井上荘太郎もまた，当人の行動を諫止しなかった責任を問われて，逼塞の罪に処せられていることである。脱藩行為にもひとしい冒険的な行動をとれば，必ず処罰されるのみならず，親しい友人たちにも累（るい）を及ぼすことはわかっていながら，抑制できない松陰の直情径行で一途な性情は，安政元（1854）年，ペリー提督の率いる米国艦隊に便乗して，ヨーロッパに亡命しようとする行為に，もっとも典型的に現われている。

ここで想い起すのは，福沢諭吉である。諭吉は，安政元（1854）年二月，兄三之助の奨めに従い，

---

(24) 前掲書，二一九頁。

(25) 山川菊栄『覚書—幕末の水戸藩』『山川菊栄全集』別巻，岩波書店，一九八二年，参照。

伴われて長崎に蘭学修業に出発した。しかしその後一年たった安政二年，奥平藩家老奥平壱岐の計略によって，母の病気を理由に中津に帰ることを命じられた。『自伝』の語るところによれば，虚偽の手紙の真相を知って帰国を断念した諭吉は，江戸を志したが，途中，兄の勤務地大坂を訪ねたところ，強くひきとめられ，緒方洪庵の許で蘭学修業に励むこととなった。諭吉は，幼時は，叔父中村術平の養子となっていたので，本来，中津へ帰るべきところ，無断で大坂に滞在したわけで，本来ならば，藩の規律に違反するものとして譴責の処分をうけることが考えられる。しかし譜代の十万石，中津藩は放任したばかりか，やがて数年たって，緒方塾の塾頭にまでなった蘭学書生福沢諭吉の実力を評価し，江戸で蘭学塾を開かせたほどである。

これに比べるならば，外様の大藩，毛利家の処置は，当然とはいえ峻厳なものであった。だが，藩主の信任厚い松陰には，特に父百合之助にたいして内諭があり，以後十年間諸国遊学が許されることとなった。松陰二三歳のときである。青春期のもっとも重要なこの時代，十年もの間，諸国遊学という行動の自由を得たことは，彼を卓越した思想家に育て上げる土壌となった。封建的な身分制度と封土の細分状態のなかで，松陰はその重苦しい枠組みを超え，自由な天地に飛翔する絶好の機会に恵まれたのである。その点では福沢諭吉も同じであった。橋本左内，西郷隆盛，そしてまた横井小楠等は，その主君松平春嶽（慶永）や島津斉彬の支持の下で，主君の命を奉じて対幕府政策の立案者，いわば反体制的な幕末政治家として活動する任務を負わされていた点が，特徴的である。彼らにも行動の自由を許されており，諸国の士と交わって見聞をひろめ，幕政の改革を使命とすることを見失わない限りでは，比較的自由であったが，しかし対幕府政策という明確な目的の前で，その生活と活動には，いわゆる職業的な政治家として，いちじるしい制約が課せられていた。これに比べるならば，吉田松陰も福沢諭吉も，自己の学問的関心のままに行動することができたのは，彼らが，殊更に政治的任務を負わされていなかったからであり，そのことがその後の二人の運命を決定的にした。だが，諭吉とは異なり，松陰は，むしろ自らに，政治的任務を課したのであった。

松陰が，生涯の師佐久間象山に会ったことはすでにふれたが，嘉永六（1853）年，正月一六日，松陰は，藩侯から諸国遊学を許可され，二六日，萩を発し，讃岐，摂津，河内をへて伊勢に至り，さらに美濃，信濃を通って五月二四日江戸に到着した。この間，諸国の有識者を訪問，見識をひろめ，二五日，鎌倉瑞泉寺に伯父竹院を訪ね，六月一日，江戸に帰った。

六月四日，佐久間象山に，江戸再遊の挨拶に行ったとき，象山はすでに不在，ペリー提督率いる米国艦隊参観のために浦賀に急行したという。この時点から，米艦に便乗して密航しようとする冒険的な企てに失敗，安政元年，従者金子重之助とともに幕府により捕えられ，十月，萩におくられて野山獄に投じられるまでの一年五ヶ月，さらにそれから四年数ケ月，いわゆる安政の大獄に連座して，安政六（1859）年十月二五日，伝馬町の獄舎において刑死するまで，実に多彩な活動を展開しつつも，慌しい晩年であった。この数年に亘る松陰の行動の軌跡を辿るとき，世論としての，幕末期を覆いつくしたかにみえる尊王攘夷運動との関連で，彼の思想は微妙に揺れ動いたのではない

かと考えられる。

興味深いことは，嘉永三（1850）年，ペリー提督来航直前，象山は江戸深川の真田藩邸に，砲術教授の看板を掲げ，砲術家としての名声がたかまった。その結果，福沢諭吉の藩である中津奥平藩は，その藩士七〇名を象山の許に入門させ，洋式の訓練をうけることとなった。[26] 当時，世論として尊王攘夷の思想が支配的で，仮に開国がやむをえないとしても，朝廷の勅許をえて行うべきであるという意見が通念としてうけいれられていた。安政元（1854）年幕府が勅許を待たずに，米国との間に和親条約を締結したことは，識者の間にはげしい抗議の声があがった。すなわち浦賀の米艦の来航によって刺激された尊王攘夷運動は，これを機に，未曾有の規模で盛り上った。象山と松陰はこうした激動する世論のなかにあって，「敵を知り，己を知れば，百戦危からず」の孫子の兵法に則り，何よりも敵情，すなわちヨーロッパ諸国の兵法をはじめ，軍備の情況，科学技術の発達の程度などを探索する必要を痛感した。

諸国遊学を志し，博覧強記，何事にも好奇心が強く，直情径行の青年，松陰にたいして象山は，こうした役割を期待したのではなかろうか。つぎの送別の詩には，師の愛する門下生にたいする惜別の情と洋々たる前途にたいする祝福がこめられている。

之子（このし）霊骨有り，久しく厭う蹩躠（べつせつ）の群。衣を振う万里の道。心事未だ人に語らず。則ち語らずと雖も，忖度（そんたく）するに或は因あらん。

行を送って郭門を出ずれば，孤鶴秋旻（しゅうびん）に横たわる。環海何ぞ茫々たる，五州自ら隣を成す。周流形勢を究めなば，一見百聞を超えん。智者は機に投ずるを貴ぶ　帰来須（すべか）らく辰に及ぶべし。非常の功を立てずんば身後誰れか能く賓せん。[27]（但し原文は漢文）。

いかに象山が偉大な教師で，その激励があったにせよ，また松陰が比類稀な俊才であるとしても，嘉永四（1851）年，藩主に随しての江戸滞在，その間東北旅行によって見聞をひろめ，また象山の門下に加えられ，その後二年たって，再度の江戸留学の際，黒船来航の体験という短い期間に，国禁を犯しての海外渡航を敢行しようとした動機は，一体何であったのか，幕末知識人の活動という点でも，松陰の行動は，他のいわゆる攘夷論者とは異った思想によって彩られていたのではなかろうか。

（四）　夷狄と文明国のはざまで――松陰と勝海舟

尊攘の志士吉田松陰の思想には，武力を背景に，国交を迫ってくるペリー艦隊の圧力にたいするはげしい憎しみと反感，他方，ヨーロッパ列強の情況を一目，自分の眼で確めずんば已まない熱烈

---

(26)　大平喜間多『佐久間象山』吉川弘文館，平成三年，八五頁。
(27)　前掲，『松陰全集』第一巻，七三頁。

な好奇心と，この両者が相矛盾する形で混在していた。

「嘉永癸丑九月十八日，朝，江戸を発し，将に西遊せんとす。この行，深密の謀，遠大の略あり。象山師，首め之が慫慂を為し，友人義所（鳥山新三郎）・長取（永島三平）・圭木（桂小五郎），亦之が賛成を為す。其他の深友舊友一も識る者なし」(28)

アメリカ艦隊は，嘉永六（1853）年六月三日，浦賀に来航して国交を求める大統領の親書を幕府に提出，国書にたいする回答を明年に延期することを認めて，同月一二日，琉球に去った。その後，七月一八日，ロシア使節，極東艦隊司令長官プーチャチン，軍艦四隻をひきいて長崎に入港，ペリーと同じく国交を求めた。

こうした国をあげての騒擾のなかで，「深密の謀，遠大の略」とは，一体何を意味するのであろうか。松陰の立場は，その水戸学への傾斜からも明らかなように，一方において絶対的攘夷主義に加担しながら，他方，敵対するヨーロッパの情況にたいする探求心と畏敬の念が，交錯する複雑微妙な心境のなかで揺れ動いていた。「象山師首め之が慫慂を為し」とあるように，まず何よりも条件づき開国派である象山の精神的な影響を無視することができない。同時に彼は，鳥山新三郎や桂小五郎（後の木戸孝允）にはその意図を打ち明けていた。松陰のこのような行動の背景には，黒船来航によって，幕府の政策にも外交をめぐって大きな変化がおこり，嘉永六年九月，二百数十年に亘って固守してきた鎖国令を修正して，各藩にたいして大船製造許可を通達したことと関係がある。幕府はすでにオランダに軍艦二隻を注文，すなわちのちの咸臨丸と朝陽丸である。そしてこれとは別に安政二年六月，オランダ政府は，ファビュス中佐（G. Fabius）を通じて，幕府にオランダ国王の名において蒸気船スームビング号（Soembing）を献上した。後の観光丸である。

このような時代の一大転換期に，象山は，松陰に，幕府が海外に俊秀をおくり出す意図があることを語ったことが，安政元年，下田踏海の試みが失敗して，萩の野山獄に移された後，獄中で綴った「幽囚録」のなかに記されている。（以下の引用は漢文を読み下し文としたものである）。

「吾師，平象山，経術深粋，尤も心を時務に留む。十年前，藩侯執政と為り，外交の議を上せ，船匠，礮工（礮は砲に同じ……引用者）舟師，技士を海外に傭い，艦を造り，礮を鑄て，水戦を操り，礮陣を習うことを論ず。謂えらく然らずんば，以て外夷を拒絶し，国威を震燿するに足らざる也」(29)。

ここで，「藩侯執政と為る」とあるのは，象山の真田藩主幸貫である。彼は，天保一二（1841）年，抜擢されて幕府老中となり，翌天保一三年，土井大炊頭とともに海防係に任ぜられた。これより先，天保十年，いわゆるアヘン戦争が始まり，その結果が清国の敗北に終って，上海，厦門，福州および寧波の開港となり，香港が割譲されて，英国の植民地になったことに幕府は，衝撃をうけ

(28) 前掲『松陰全集』第七巻，三二七頁。
(29) 「幽囚録」『松陰全集』第一巻，五九八頁。

た。幸貫は，このような時勢の急転換に応ずるために，象山を顧問として海防を研究し，文政八(1825)年の，黒船の無二念打払令を改正する一方，諸大名にたいし，海岸線防備のために，大砲鋳造を命じた。(30)

象山は，松陰に以上のような藩侯幸貫の意図を語ったものと思われる。さらに松陰は，つづける。

「蘭夷に命じて，軍艦を致すを聞く。大いに喜びて謂えらく，徒らに之を蘭夷に託するは未だ善を尽さず。宜しく俊才巧思の士数十名を撰び，蘭船に付して海外にもだし，其の便宜をして事に従い，以て艦を購わしむべし。則ち往返の間，海勢を識り，操舟に熟し，且つ万国の情形を知るを得ん。其の益を為す。因って竊かに建白する所有り。然れども官能く之を断行する無し。予航海之志，実に此に決す……」。(31)

この文面で見る限り，松陰の海外密行への意志は，象山が幕府のオランダからの軍艦購入に際して，数十名の有能な若者を便乗させ，帰途，彼らを訓練して軍艦を日本にもたらすことの重要性を，戦略的な観点から幕府に建白したが，とり上げられなかったことを，松陰に語ったときに決定したということができる。この点については，松陰は，安政元年一一月二七日，実兄杉梅太郎に当てた書簡の一節に，つぎのような文言が見出される。

「幽囚録にも陳し候通り，去年，象山御勘定奉行川路（川路聖謨のこと……引用者）の所迄密啓いたし候事之あり，内，購艦の一策アリ。其の説過半行レサウニ之有り，因テ川路が象山へ，門人中，然るべき少年ハナキカト尋ネシ故，象山数名を録し遣し候中ニ弟が名も之有りたる趣也。此事内密ニ象山話し，聞かせ候。然る処，其の議忽ち裏がえり候故，犯禁の事に申し及び候。然れば，幕府は請うとも免許なきは灼然也……」。(32)

これによって，松陰が国禁の海外渡航を志した重要な契機が，海防係を勤める幕府の要人，勘定奉行川路聖謨が，象山と親密な関係にあったところから，幕府の将来の方針を洩らしたことを，象山が松陰に語ったことにあることは明らかである。さらにつづいて，つぎの一節は示唆的である。

「又，来原，桂，赤川三人の連署にて，西洋遊学之儀ヲ願い出，桂ナドハ，行装とて素袍ヲ誂へ候事ナドモアリ。然れ共，其の願御沙汰に及ばされざる段ニて，政府より下ゲ候。然れば，本藩に請うとも無益なり……」。

これを読むと，象山の門下生のうち，何人かが幕府の許可を得て，おそらく幕府が計画した外国へ派遣の留学生のなかに加えられることを陳情し，請願して，可能性のようなものを示唆されながら，しかも挫折したとは，考えられないだろうか。つぎのような事実と考え合わせると，一見，恰も猪突猛進的な思いつきであるかにみえる松陰の行動にはそれなりに，ひとつの歴史的必然性の支

(30) 前掲，『佐久間象山』六四～六五頁。
(31) 前掲，『松陰全集』第一巻，五八九～五九〇頁。
(32) 安政元年十一月廿七日，「兄梅太郎に贈る」『松陰全集』第三巻，二四七～二五二頁。

配のもとにあったと言えるのかもしれない。

すでにオランダ国王ウィレム二世による開国の勧告や，嘉永五（1852）年八月，オランダ商館長ドンケル・クルチウスが，明年アメリカ艦隊が，日本に来航して通商条約の締結を迫る意味の警告を含む書簡を提出したにもかかわらず，これを無視した結果，ペリー艦隊が来日，悪夢が白昼の現実となって，幕府は直ちにクルチウスに諮問した。彼は，洋式海軍建設のために助言を求められて，海軍士官養成が急務であることと，天文学，算術，代数学および砲術などの教授が必要で，そのためにはオランダ語の学習が不可欠であるとの趣旨を力説した。この勧告にもとづき，幕府は七ないし八隻程度の軍艦をオランダに注文することとなった。そしてこの軍艦を操縦して日本にもたらすために，海軍士官の養成すべく，安政二（1855）年，長崎に海軍伝習所が設置されることとなった。永井玄蕃頭尚志が伝習所取締に任じられ，幕臣のなかから，第一回の伝習生として矢田堀景蔵，勝麟太郎，永村享次郎等三一名が選ばれ，勝を含むこの三名は，練習生書記掛を命じられた。この伝習所生は，必ずしも幕臣だけでなく，薩摩，熊本，福岡，萩，佐賀などの藩士一五〇名が選ばれたという。(33)

してみると，その計画に参加する若者のなかに，勝麟太郎が加えられていたことは，象徴的であった。おそらく勝は，象山門下として師の推薦とともに，幕臣であるところから，勘定奉行川路聖謨や永井玄蕃頭の推挙があったことが考えられる。松陰の実兄梅太郎への書簡のなかで，微妙な表現は，「此事内密ニ象山話し聞せ候。然る処，其の議忽ち裏かへり候故，犯禁の事に申し及び候……」という文言である。おそらく，海軍伝習所の人選は秘密のうちに行われ，松陰はじめ桂など，長州勢は排除されたのではなかろうか。勝は嘉永三年に象山門下となり，筑前藩の蘭学者，永井青崖から必死に蘭学を学び，(34) 弘化二（1845）に入門して，同四年秋から翌年にかけて，蘭学辞書『ドウーフ・ハルマ』(35) 二部を筆写し，その一部を売って生活費にあてたほどの勉強ぶりであった。こうしてやがて万延元（1860）年，遣米使節を護衛する任務を負った咸臨丸艦長として渡米し，この航海中に福沢諭吉に出会うのである。

---

(33) この問題についてのくわしい叙述は，カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』，水田信利訳，平凡社，1982年，六六頁以下。篠原宏『海軍創設史――イギリス軍事顧問団の影』リブロポート，1986年，三四頁以下。藤井哲博『長崎海軍伝習所――十九世紀東西文明の接点』中公新書，1991年，十頁以下。

(34) 石井孝『勝海舟』吉川弘文館，平成六年，四頁。

(35) 長崎の出島に，長く商館長として勤務していたヘンドリック・ズーフ（Hendrik Doeff）は，吉尾権之助，名村八太郎等通詞十名の協力をえて，文化九（1812）年，フランソア・ハルマ（Françios Halma）の蘭仏辞典第二版によって，蘭日辞典の編纂を志し，天保四（1833）年完成，清書して一部を幕府に献上，江戸の幕府天文方と長崎奉行所に各一部を備えた。これが『ヅーフ・ハルマ』字書で，福沢諭吉も適塾で，この字書を便りに蘭学を勉強した（日蘭学会編『洋学史事典』，昭和五九年，四六一頁）。

福沢諭吉も勝海舟も，立身の端緒となったものは蘭学の学習であった。勝はすでに蘭学を学んで五年，嘉永三（1850）年，赤坂田町で蘭学塾を開き，西洋砲術の講義をはじめたというほどで，その実力も相当のものであった。福沢はややおくれて安政元（1854）年二月，長崎で蘭学修業を始めるのだが，恰もこの年，三月五日，松陰は，従者金子重之助（重輔とも書く）とともにアメリカ軍艦に投じて密行を計画，下田沖の米艦に接近したが，拒否されて失敗，自首して，断罪の結果，幽閉された。

以上前後したが，勝，福沢および松陰の行動を断面図として把握したとき，松陰の海外渡航の意図は，確かに明白である。だが，その目的とする西欧文明への接触のための媒体ともいうべき外国語，すなわち，オランダ語の学習についての関心が欠如しているのは，何故であろうか。学習の期間が短く，時間的余裕がなかったということであろうか。その頃，土佐の漁夫，中浜万次郎が帰国し，許されて幕府の通詞として召し抱えられたことが評判となっていた。象山は，このことを示唆して，漂流してまず支那に渡り，さらに西洋に渡ることを暗に示したことを，以下のように大日付井戸対馬守覚弘の前で陳述している。

「吏云う，其の方，十年来，厚ク国家の為外寇（がいこう）を患へ，遂に此度之事に及び候段，其の志は感心なる事也。去り乍ら，重き国禁を犯ス段は恐入候や」。

「象山云う。御国禁は犯し申さず……。此の段は恐れ乍ら，私深ク苦心仕候儀御察し願い奉候。十年来，間諜細作之急務なる事は，心付き候へ共，重き御国禁を存じ候故，曽（かつ）て門人などへもオクビニモ出したる事なし。然る処，昨年土佐之漂民萬二郎（ママ）(36)（中浜万次郎のこと……引用者註）召し出され候故，私存じ候ニは，間諜事も，追々官許之有る可く候へ共，廟堂も御多事ニて，未だ其の儀に及び玉わず。併し，漂民を永ク禁錮スルノ一事は，先づ御旧例を改められたる姿なり。然（さ）れば志士外国へ出候も，漂流とさへ名が付き候へば，官ニも其ものを御宥寛成され候道之有り，因而（よって），風に放たれ候様と申したる事に御座候。窃（ひそ）かに廟堂上を察し奉り候ニ，故法古例に付き，據（よ）んどころ無きも，御沙汰に及ばされ難き事之有る故，何とか術を設け，海外に出で，功をなしかへり，御役に立って可く候へば，法外の意ニ行はれ候様ニ苦心仕り候儀に御座候。且つ昨年来の神州三千年之大変故，官ニも亦格別之御処置之存る可く存じ奉り候故，寅等が行う所，然る可し申し候儀に御座候。全ク御国禁を背き候心底には御座無く候(37)」。

それにしても松陰の行動は，何と性急で慌しいことか。嘉永六（1853）年六月一二月，ペリー艦隊はわずか十日間の滞在ののち去ったが，代って七月一八日，ロシア使節プチャーチンが，やはり軍艦四隻を率いて長崎に来航，松陰ははじめ，ロシア艦隊に便乗して密行をとげようとしたが，十

---

(36) 中浜万次郎については，川澄哲夫編著，鶴見俊輔監修『中浜万次郎集成』小学館，1990年，一一六頁にも，この史料が掲げられている。なお，中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，をみよ。

(37) 兄，梅太郎宛書簡，安政元年十一月二七日『全集』，第五巻，二五一頁。

月二三日，プチャーチンは長崎を去ったため，果せなかった。ところが翌安政元（1854）年正月一四日，ペリー艦隊は再び江戸湾に姿を現わした。幕府はやむなく和親条約を締結したが，その二日後の三月五日，江戸を発して神奈川に赴き，さらに下田まで行き，三月二七日の夜中，アメリカ軍艦に接触して，その意図を告白，しかしとり上げられなかった。

ペリー提督の『日本遠征記』には，つぎのような興味ある記述が見出される。和親条約締結後，海軍士官らは，毎日上陸し散策を楽しんでいたが，そのうちの一群の人々は，かなり田舎に入り込んだとき，二人の日本人がついてくるのを発見した。

「その二人は秘かに近よって来る様子だし，又あたかも話をする機会を求めたい様子なのを見てとって，アメリカの士官たちは，二人が近づいて来るのを待った」[38]。

その日本人は，「相当な身分を表徴する二本の力を帯び，立派な錦襴（にしきひとえ）の幅広くて短い袴をはいていて」，地位と身分のある人々であることがわかった。上流階級特有の慇懃（いんぎん）な洗練さが，彼らの態度に現われていたにもかかわらず，何か疚（やま）しいことを行おうとしているかのようなおちつきのない様子で，周囲に気を配りながら，何か小さく畳んだ紙片を士官のひとりの上衣に滑り込ましたという。

この紙片に書かれている内容は，翌日，松陰と重之助が，密行のためにアメリカ軍艦を訪問することを，秘密に宣言する文書であった。勿論，漢文であるので，通訳として便乗していたウィリアムズ（Samuel Wells Williams）が英文に訳した文章を，さらに邦訳したものを，読者は読むことができるが，ここでは，重要な史料なので，松陰全集のなかから，その全文を掲載することにしよう。（但し洞富雄氏訳の読み下し文を拝借した）[39]。

「日本国江戸府の書生瓜中万二（くわのうちまんじ）（吉田松陰の偽名），市木公太（金子重之助の偽名），書を貴大臣，各将官の執事に呈す。生等賦稟〔生れつき……訳者註〕薄弱，軀幹矮小，固より自ら士籍に列するを恥ず。未だ刀槍刺撃の技を精（くわ）しくする能はず，未だ兵馬闘争の法を練る能わず，汎々悠々として歳月を玩愒（がんかい）〔怠って時を過す〕す。支那の書に読むに及んで，稍（やや）欧羅巴，米利幹（めりけん）の風教を聞知し，乃ち五大州を周遊せんと欲す。

然り而して，吾が国は海禁甚だ厳しく，外国人の内地に入ると，内地人の外国に到ると，皆貸（ゆる）さざるの典あり。ここを以て周遊の念勃々然として心胸の間に往来し，而も呻吟，趑趄（ししょ）〔行きつ戻りつする〕すること，蓋し亦年あり。幸にして今貴国の大軍艦，檣（しょう）を連ねて来り，吾が港口に泊し，日たる已（すで）に久し。生等熟観，稔察〔審（つまびら）かに察する〕して，深く貴大臣，各将官，仁厚愛物の意（こころ）を悉（つく）し，平生の念又復た触発す。今則ち断然策を決し，将に深密に請託して貴船中に仮座し，

(38) ペルリ提督『日本遠征記』（四），土屋喬雄，玉城肇訳，岩波文庫，1990年，五八頁。

(39) S.W. ウィリアムズ著，洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』雄松堂，昭和五八年，二八四～二八六参照。

海外に潜出して以て五大州を周遊せんとす，復た国禁をも顧みざるなり」。

ここには，幕府を非難攻撃する尊王攘夷の志士の相貌は影をひそめて，ひたすらヨーロッパ文明を希求する青年の姿が投影する。

願わくは執事厚くも鄙夷を察して，此の事成るを得しめられよ。生等の能く為す所は，百般の使役も惟だ命是れ聴かん。夫れ跛躄者の行走者を見，行走者の騎乗者を見る，其の意の歆羨〔むさぼりうらやむ〕如何ぞや。況んや生等，終身奔走するとも，東西三十度，南北二十五度の外に生ずる能わざるをや。ここを以て夫の長風に駕し巨涛を凌ぎて，千万里を電走し五大州を隣交するを視ては，豈特に跛躄の行走と，行走の騎乗との譬うべきがごとくならんや。執事幸に明察を垂れ，請う所を許諾せられなば，何の恵か之に尚えん。但し吾が国海禁未だ除かれず，此の事若し或は伝播せば，則ち生等徒に追捕せらるるのみならず，刎斬〔頚をはね，斬り殺す〕立ちどころに到るは疑いなきなり。事或はここに至らば，則ち貴大臣，各将官，仁厚慶物の意を傷うも亦大なり。

執事願わくは請う所を許し，又当に生等の為めに委曲包隠して開帆の時に至り，以て刎斬の惨を免るるを得しむべし。若し他年自ら帰るに至らば，則ち国人も亦必ずしも往事を追窮せざらん。生等，言は粗暴と雖も，意は実に誠確なり。執事願わくは，其の情を察し其の意を憐み，疑うことを為すなかれ。万二，公太同じく拝呈す。

日本嘉永七年甲寅三月十一日

このあとに，「別啓」として，アメリカ軍艦に接近するための要領などが書かれているが，それはともかく，この二人の見知らぬ日本人青年を迎えたペリー提督の表情は，印象的であるが，また複雑であった。『日本遠征記』の記録から，その部分について考察してみよう。

小舟を操り，荒い濤を凌ぎながらようやくたどりついた米艦ミシシッピ号の当直士官から，旗艦ポーハタン号（Pawhatan）に行くように説得され，再び困難を感じながら旗艦に到着した。この二人は，士官たちに手紙を手渡した者であることが確認され，問答が始まった。

「小舟に乗ってきたために，ひどく疲れ切っているようであった。二人共，二本の刀を佩く資格があるもので，一人はその時まだ刀を一本帯びていたが，他の三本は小舟の中に残してきたのであり，その小舟は刀と一緒に漂流して行ったのである。彼等は教養ある人達で，支那官語の（the mandarin Chinese）を流暢に形美しく書き，その態度も丁重で極めて洗練されていた」[40]。

おそらく松陰と重之助は，手書きの文書に記した通り，渡航の意志を熱を込めて訴え，密航を認めて艦内にかくまってくれることを懇願したものであった。「もし陸に帰れば斬首されると断言し，このまま置いてくれと熱心に懇願した。この懇願にたいしては，断固として，しかし親切に拒絶した」。

---

(40) 前掲，『日本遠征記』（四），六三頁。

長い間，この二人の日本人青年と提督との間で議論が行われ，松陰と重之助はアメリカ人の道義心に訴えたが無駄であった。「一艘のボートが下されて送り帰されることになった。彼等はそれを少しばかり穏やかに拒んだが，自分達の運命を悲しみつつ，悄然と舷門を下りて，彼等の小舟が漂着したと察せられる一地点に上陸せしめられた」。

この二五歳と二三際の青年の，国禁を犯しての冒険的な行動は，ペリーにどのような感慨を催させたのであろうか。この勇気ある行動の背後に，「彼等の言明している動機とは別のより立派でない動機に動かされたのだということもあり得る[41]」と，ある種の疑念を抱いたことも当然考えられよう。しかしそれにもかかわらず，ペリーのつぎのような評価は，当時のアメリカ海軍提督の識見の確かさと日本武士の矜持を物語って余りあるものといわなければならない。

「この事件は，同国の最重な法律を破らんとし，又知識を増すための生命をさえ賭そうとした二人の教養ある日本人の烈(はげ)しい知識欲を示すもので，興味深いことであった。日本人は疑いもなく研究好きの人民で，彼等の道徳的並びに知識的能力を増大する機会を喜んで迎えるのが常である」。

ペリー提督は，パナマ運河が未だ開通していない時期，艦隊を率いて喜望峰廻りで来日したので，セント・ヘレナ島やセイロン（スリランカ），香港および沖縄をへて，江戸湾に到着した。その間，アジア地域の人情や風俗にふれて，それぞれ異国情緒にひたったことは，『遠征記』に詳しく物語られている。しかし東洋の島国帝国日本に辿りついてはじめて，サムライとその武士道を実感したのではなかろうか。

「この不幸な二人の行動は，同国人の特質より出たものであったと信ずるし，又人民の抱いている烈しい好奇心を，これ以上よく示すものはない。ところでその実行は，最も厳重な法律と，それに違反させないようにするための絶えざる監視とによってのみ，抑えられてるのである。日本人の志向がかくの如くであるとすれば，この興味ある国の前途は，何と味のあるものであることか，又付言すれば，その前途は何の有望であるとか！[42]」(In this disposition of the people of Japan, what a field of speculation, and, it may be added, what a prospect full of hope opens for the future of that interesting country!)

*　*　*　*　*

松陰は，何故，生命の危険を冒してまで，密航を企てたのであろうか。佐久間象山が，川路聖謨の信任厚く，松陰が門下生であったところから，大罪にもかかわらず，重之助とともに藩での幽閉という非常に軽い罰に処せられた。おそらく川路の心中には，他日，この逸材を日本の前途のために大いに役立てうるという確信があったからであった。

---

(41)　前掲，『日本遠征記』(四)，六三頁。
(42)　上掲，六三～六四頁。

また松陰は，尊王攘夷という当時の圧倒的な世論に棹さしながら，ペリー提督に宛てたすでに掲げた「渡航宣言文」には，西欧文明にたいする憧憬にも似た賛美と，ひたすらなる渡航への熱望のみが陳べられていて，その真情を探れば，攘夷よりはむしろ開国論にゆきつくはずである。彼は時代の流れを正しく読み，日本の前途を洞察するには，あまりにも若く，また性急にすぎた。

安政三年，松下村塾で門下生を教育しつつあったとき，水戸の浪士がひそかに井伊大老を討とうとする風聞を耳にし，松陰は憂国の情もだし難く，倒幕の一念から同志を糾合し，彼らに先んじて間部詮勝（まなべあきかつ）を暗殺し，勤王の志士の意気を盛り上げようとした。いわゆる安政の大獄によって，橋本左内等とともに処刑されたのは，松陰が間部殺害の策謀に加担したことを理由とされたことによっている。[43] 開国論にもひとしい文明論を抱きながら，攘夷論を説いてやまない彼の矛盾した精神的態度の背後には，象山からの大きな影響にもかかわらず，ヨーロッパ文明把握の武器ともいうべき蘭学には熱意を示さなかったことと関係がある。

勝海舟が象山に入門したのは嘉永三（1850）年で，同時に彼は赤坂田町に蘭学塾を開いた。松陰の入門は，翌嘉永四年であったから，松陰は象山の勧めに従って，勝から充分にこの西洋の学問を学ぶことができたはずである。しかし松陰が，勝海舟と接触したという証拠は乏しい。勝が幕臣であることを，長州人松陰は意識したからであろうか。勝とともに，坂本竜馬もまた砲術研究のために象山に入門しているから，勝を通じて松陰は，竜馬や江川英竜（太郎左衛門）を知りえたかもしれない。これによって，彼の狭隘な視野はひろげられて，やがて勝や福沢諭吉とともに咸臨丸で渡米することになるジョン・万次郎から，帰国直後の時期だけに，アメリカ体験をじかに聴くことができたであろう。その意味で松陰の死は，はかり知れない国家的損失であった。

それにしても，幕末とは実に不思議な時代ではなかろうか。嘉永六年から慶応四年までのわずか十五年の間に，一民族の実に一世紀にも匹敵するさまざまな歴史的事件が凝集し，今日理解しがたいことも少なくない。松陰が長州藩の兵学師範として，藩侯の面前で戦術を説く俊才であるならば，当然，砲術，それもヨーロッパの砲術の研究に専心すべきで，そのためにはオランダ語の学習は不可欠である。松陰は密航に際し，携帯品のなかに，小折本，孝経正本一，和蘭文典二その他があったと伝記には記されているが，[44] これだけでは彼が洋式砲術の研鑽を心がけたということにはならない。所詮，松陰は，哲学者あるいは優れた教育者，思想家であっても，たとえば勝海舟や福沢諭吉にみるように，新しい時代の扉を押し開く政治家的な資質はなかったのである。

いまひとつ幕末における大きな問題は，井伊掃部頭直弼の存在である。この人物が，もし大老の地位につくことがなかったならば，幕末の風景は，実際とは非常に異なったものとなったであろう。歴史に，「もしも」という仮定は許されないといわれるが，ともかく彼は強烈な個性の持主であっ

---

(43) 前掲，『佐久間象山』，一四九～一五三頁。
(44) 前掲，『松陰全集』第一巻，七九頁。

た。歴史書にはしばしば，彼を大政治家（'Statesman'）として描いているものが少なくないが，筆者の見方はやや異なる。彼は，数多い幕閣のなかでも徹頭徹尾，官僚主義で一貫した政治家であった。封建制度は，身分と格式を基本とする階級組織（hierarchy）の体制であるが，彼は職務主義を尊重し，幕閣を徳川政権官僚機構の中枢とした。幕藩体制は成熟して，封建制の最終段階に入り，ヨーロッパにみられた絶対王政に近い存在となっていた。その意味で彼は，その先輩阿部伊勢守正弘とは対照的な人物で，徳川斉昭，慶篤父子や松平春嶽あるいは一橋慶喜等の，条約締結の違勅行為の責任を追及して行った不時登場にたいして，たとえ彼らが御三家・御三卿の当主であっても，仮借することなく処罰した。吉田松陰も橋本左内も，そうした官僚的合理主義の犠牲であった。

幕末に活躍した英傑たちの間には，佐久間象山を中心に，きわめて興味深い人間関係の系で結ばれていたことがわかる。福沢諭吉は直接，この因果関係の中には把えられなかったが，もし彼が砲術研究の志をもっていれば，中津藩と象山との関係もあり，福沢は象山を識ったかもしれない。兵学や築城術あるいは砲術のような軍事学でもなく，さりとて医学でもなく，ただひたすら洋学を追い求めた福沢は，結局，経済学に到達し，来るべき時代の日本の国家構造を模索し，そのモデルをヨーロッパに見出したのである。

松陰は，勝海舟と際会しうる機会に恵まれず，新しい時代の国家について，輪郭をさえ描くことなく挫折した。その意味では，同時代に活躍しつつ，惜しくも面識の機会をえなかった橋本左内と横井小楠は，その思想的先進性において，吉田松陰や福沢諭吉と対比することができ，追究されるべき課題であろう。

（名誉教授）